

奢るから、ちよいと俺の話を聞いてくれる？ まあそうじゃなくても、たいていは俺のほう奢ってるけどね。

仕事終わり、そんな調子でステイヴを誘ったのは俺のほうだ。相棒は二つ返事で了承した。奢りなしでも相談には乗ってくれただろう。なんでって、当人がそう言ったから。

でもそれだと俺のほうに困る。あれだ、ほら。素面じゃ話づらい内容だから。できれば俺と話を聞く相棒、両方アルコールが入った状態で話したい。そうすりゃ、いろんなものが少しはごまかせそうだし。

「で、なんだ話したいことって。言えよ」

ということで相棒を店に連れ出し、かれこれ一時間。アルコールは双方きっちり摂取した。にもかかわらず肝心の話を、俺はまだ切り出せず今にいたる。

ステイヴは俺が話し出すまで待つつもりだったみたいだが、いい加減じれつなくなったらしい。お前の様子が最近おかしいのは気づいてた。なにか悩み事が

あるんだろう？　なんて促されて、ますます話じづらくなる。

「グレイスのことか？　それともまた、お前の母さんのこと？」

「あー……そう。いや、違う」

ビール瓶を傾けながら、曖昧な言葉を返す。いい加減話をしなきゃ。今日わざわざ呼び出したのは、なにも突然思いついたからじゃない。ずいぶん前から話をしなきゃならないと思っていて、けどふんぎりがつかないから先延ばしにしていた。

「話つていうのは、その。あれだ」

今日こそは今日こそはと思つて、ようやく二人っきりの飲みに誘えたんだ。なのに今日まで先延ばしにしたら、次は一生こないかも。今だ。今しかない。

「……俺、お前のことが好き、なのかも」

「はあ？　かもって」

かなり言葉を詰まらせながらも言い切ったが、返ってきたのは呆れたステイヴの声。ようやく話を切り

出したかと思えば、出たのは冗談か。そんなふうに思っているんだろう。でもこれは、それこそ冗談みたいな話だけど冗談じゃない。俺がずっと抱えていた悩みは、正真正銘これだ。

「お前が俺のこと好きなのは知ってるよ。今さらなに言ってるんだ。それを言うために誘ったわけじゃないだろ？」

本題を切り出したにもかかわらず、満面の笑みでステイヴはなお俺に問いかける。よくもまあ、恥ずかしげもなくそんな言葉を口にできるよな。うぬぼれやがって。嬉しそうなのが、なおさら腹立つわ。

こういう反応を予想はしていた。言葉が届いても、その意味を正しく理解してくれるかはまた別だ。特にこの男は、ほとんどと言っていいほど俺の言葉を理解してくれない。

「ああ、そうだよ。今のを言うただけに呼び出したの。ほんとと腹立つけど、お前のこと好きなの」

んなわけねーよ。そう言っちゃまえばさっきの発言は

なかったことにできた。でも、もうあとには引けない。正しく言葉の意味を伝えるために、卑怯にもつけた『かも』を取り除く。

「だから困ってるんだよ」

本当はこんな気持ち、白状する気はなかった。ずっと胸の内にとどめておくつもりだったんだ。でも自分の気持ちは結局ごまかせないし、そうしたところで嘘や隠しごとに敏感な相棒に気づかれないわけがない。現に、最近様子がおかしいって言われたし。

「なんで困るんだよ」

俺の言葉に、ステイヴは首を傾げた。今日はすべてを打ち明ける気で来たものの、いざとなると核心に触れる言葉が出てこない。ああ、嫌だね。いつもは黙ってると言われたって、喋り続けるのが俺なのに。

ダノ、と俺の名を呼んでステイヴが顔を覗きこんでくる。ハワイの空みたいな目が、俺の胸中を探ろうとじっと見つめていた。頼むからそんな目で見るなよ、いたたまれなくなるだろ。観念して声を上げる。

「だっておかしいだろ！ 俺がお前を好きだなんて」

「なんで。相棒だろ？ 別におかしなことなんて、」

そこでようやく、スティーヴは真の意味に気がついたらしい。言葉をひっこめて、あんぐりと口を開いたまま固まっている。

「好きって……まさかそういう？」

数秒の間を置いて、スティーヴは呆然と呟く。その反応は、言葉を正しく理解した証拠。こいつは普通の人間の感覚をどっかに置いてきたような野獣だが、決して鈍い男じゃない。人の機微はちゃんと理解できる。むしろ、それに関しては察しがいまいほうだ。

「……そういうこと」

俺が口にした言葉は、友情の意味でなんかじゃない。もちろん友達としても好きではあるさ、ム力つくことは多いとしても。でもそれだけじゃなくて、俺が言っていた好きは恋愛感情の分類に入っていた。なんかこいつに『恋愛』って言葉を使うと釈然としないが。

「えっ、なんで？」

なんで？ なんでって。それ聞くか？ 同年代の男

で、がっしりとしてムキムキな、言葉で説得するより銃弾撃ち込んだほうが早いと思ってるような野獣。それがスティーヴ・マクギャレットだ。どう考えても俺のタイプじゃない。まず男だし。なのに、なんで俺がそんなやつに恋愛感情を抱いたかって？

「お前ね、高校生かよ！ 告白してきた相手に、俺のどこが好きって聞いちゃうタイプ？」

最初は、こいつのことが大っ嫌いだった。なのに今は相棒をやってて、俺が死んだらこいつに娘を頼もうと思うまでになってる。どうしてこうなったって考えたって、なっちまったもんはどうしようもない。

「高校生じゃない！ いや、だって……友達としてって意味じゃなくて、その、本当にそういう意味で？ 冗談じゃなく？」

「なんでそう何度も確認するんだよ！ そんなに俺の言葉が信用ならないわけ？」

あまりに疑いの声をあげる相棒に、たまらず怒鳴る。